

令和6年9月7日移動教育委員会・意見交換記録（中会議室東）

（学校教育部長）第4次浜松市教育総合計画（案）の概要を説明

（黒柳委員）教育委員会では、保護者・子供・教職員による点検・評価報告を行っている。それをもとに、意見を伺いたい。

○家庭での学習について

（黒柳委員）家庭における子供の学習の様子や、家庭で取り組んでいることについて伺いたい。

（参加者）子供に任せている。

（参加者）子供が自分で学習の時間を管理している。

（参加者）小学生と中学生では違うと思うが、学校からの宿題は必ず提出するなど約束事を決めている。

（下鶴委員）なぜ学習が必要であるのかを教え、将来のことに触れて説明していくことは大事である。

（参加者）学習の動画サイトを見て勉強した気になっているのではと思うこともあるが、何かに興味を持つことは大切であると捉えている。

（参加者）スマホの利用により、明らかに学習の時間が減っている。とりあえず、任意で利用できる時間を決めている。本人の自主性によるが、親としての自分の経験は子供に伝えるようにしている。

（下鶴委員）保護者の方には、いろいろな経験値がある。家庭で約束事を決めるときには、お互いに話し合って決めるのが、望ましいと思う。

（参加者）兄弟姉妹で電子機器を使用する時間帯を相談して決めている。

（下鶴委員）ルールを決めて守っていくというのは社会性にあてはまる。自己選択、自己責任である。小さな頃からいろいろなところでルール作りを一緒にして守っていくことは、学校という小さな社会においても重要である。

（参加者）大人も考えて守っていきたい。

（下鶴委員）今の子供は選択肢が多い。選択によっては、忙しさも楽しさも感じることができる。以前は選択肢が少なかったように思う。たくさんの選択肢を持ちながら活動することは大変だと思う。

（参加者）時間的な余裕はあるとは思う。学校が子供に宿題を出すのか出さないのかという議論があり、先生たちが困っているという話を逆に聞いた。大人が忙しくさせてすぎていると思う。

（参加者）現在は子供たちの情報は学校に集まり、その情報の共有はできている。しかし、各家庭の親は、子供からしか情報が入ってこない。子供からの情報のみのため、「それがそうなんだ」という錯覚を起こしやすい面がある。このような点に、どのように対応しようとするかが課題となる。

（下鶴委員）正確な情報を確認したいということか。

（参加者）本来は、PTA が家庭内の状況を把握しなければならないと思う。今後、PTA の加入率が下がってくると、全保護者が対象とならない。学校運営協議会の在り方とも関係するが、10 年後の教育計画の中で、教育委員会は PTA の加入率を何%で想定しているのか。

（参加者）施策にある「魅力ある地域人材や団体等の連携」における、団体に PTA は含まれると思う。コミュニティ・スクール（以下、CS という。）が一番上に記載されており、正直、教育委員会は、PTA よりも CS を優先しているというメッセージと受け止めた。それは PTA が 100%カバーできていないという前提から起きてしまうというところがある。10 年後の計画を立てるときに、加入率についてどういう数値が前提なのか。

（下鶴委員）PTA 加入率の話題は全国的にある。子供を中心に、保護者、地域、教職員をつなぎ、その中で家庭教育支援の推進を保護者と連携しながら進めていくつもりである。将来的な加入率が何%というようなところまで厳密に前提としているわけではない。

（参加者）学校も教育委員会も PTA を直視してないと思う。だからこそ、任意団体ということもあるかと思うが、施策の中で、PTA の名前が出てこない。

（学校教育部長）PTA について、想定している数値について申し上げるのは難しい。直接的に「何%を維持してください」のような意見は申し上げにくい。共助的な意味合いが強い組織を維持していくのは非常に難しい時代になっている。今年度、ようやく全市立小中学校、高等学校が CS 導入校となったが、まだまだ何をやっていくのかを

模索しているようなところである。それと比べると、PTA の歴史とか積み上がっているものは、圧倒的に豊富なものがある。学校としての期待は非常に高いと思っている。学校だけで子供たちの教育が成り立つわけではない。第4次教育総合計画策定委員会は今後開催していくので、その中でこういったご意見があったことを検討していく。

（参加者）将来の CS 構想について、PTA との関連性も絡めてどのように作っていくのかというところについて、お答えをお願いしたい。

（学校教育部長）各学校の特色があり、実態・実情がある。地域の方が現在のところ、どのように CS に参画しているかも異なっている。今のところは、皆さんと学校が寄り合う中で、CS としてどういう活動をしていくかを考え合いながら、地域全体で、子供たちを見守り育て、今まで以上に一緒になっていける環境なり体制なりを考えていただく。教育委員会として、CS の望ましいあり方を理念として示していくという考え方もあるが、やはり地域、学校、それぞれの特性を、学校なり、地域内の特性を生かした形でどう結び付けていくかが重要である。

具体的な方向性は、各学校で決めていただき、各 CS の中で少しずつ定まっていけばいい。今のところ、まだまだスタートしたばかりというところである。

（参加者）PTA は、任意団体であり PTA 会費を PTA 会員から徴収することによって成り立っている。PTA は 60 年ぐらい前に始まっており、学校独自での行動ができない部分を補完するために PTA が全国各地で組織され、そして、その補完という意味において PTA という組織体の意味があったと捉えている。少なくとも、PTA は学校の足りない部分を一時的に補っているところも現状もあるかと思う。PTA 自身が将来的にどうなるのか見えないこともあるが、予算の必要性についても訴えていただきたい。

OCs の認知度について

（黒柳委員）CS に対する教育委員会の調査では、一般の保護者に対してその認知度が低いということが調査結果で出ている。その要因というか、同じ保護者として、どのように感じているのかということと、どのようにすれば CS が多くの方に認知されるかと思うか。

（参加者）そもそも CS は、何のために設置されて、どのようなものなのか。

（参加者）自由度があり、地域ごとに特徴が違うので、それに合わせて、それを学校だけでなく地域で支え合っていくという仕組みのことである。こうあるべきという絵を作れないから、時間がかかっている。

（参加者）フリースクールとは違うのか。

（参加者）フリースクールのようなものではない。

（下鶴委員）子供たちを中心にして、地域や保護者と一緒に共に育てていきましょう、というものである。

（学校教育部長）ネーミングがちょっとわかりづらくなっている。スクールという言い方をしているので、誤解をされる名前である。学校とは別に、何か地域で学校を建てるのかなというふうに、誤解をされてしまうことがある。地域全体で子供たちを守り育てる必要があるということが、元々の発想であると理解している。どのように子供たちを地域で見守りながら育てていくかを、定型で示しにくいのが実情である。実際の具体的な活動を検討をしている段階だと思う。

（参加者）集会所や公民館での活動を、学校でも行うような活動と捉えていた。

（参加者）学校主導として、地域連携を組みたくて制度設計をしたのであろう。元々は、PTA で活動できた部分もあったが、PTA 離れが表面化してきたので、別組織を立ち上げたのではないのか。PTA と別組織を行政が作ったことにより、別組織が PTA から離れていったのではないのか。

（参加者）CS と PTA が連携することに意味がある。納得して自治会が協力してくれる地域とそうではない地域がある。自治会任せにすることなく、保護者も活動に関わっていきたい。

（参加者）教育委員会が PTA の制度設計ができなかったと思う。だから、CS を制度設計したと捉えている。PTA を活用したり、予算を付けたりすればよかった。教育について考えると、学校教育、家庭教育、社会教育の三つ、大きく分けるとあると思う。教育委員会は学校教育を担うのであろう。家庭教育、社会教育はどこの範囲でやっているのか。なぜ PTA を明確に制度設計の中に入れないのか。教育委員会が、CS を中心にしていくということなら、もっと明確に伝えてほしい。ただ、ここにいるメンバーは、かなり残念な気持ちになる。組織があることによって地域を保てる部分があると思う。ただ単に教育委員と PTA が話をしたという既成事実を作るだけならばやめたほうがいい。議事録なんて誰も見ない。

（下鶴委員）「子供は学校で学び、家庭で育ち、地域で生きている存在である」、とよく言われていた。まさに学校教育、家庭教育、社会教育、それが一体となって子供を見守る機運が、これからも必要なのではないかと思う。この連携をすることは、同じ子供たちのより良い成長を願ってやっていることなので、更なる連携とか情報の共有化を進めて、二度手間にならず、のりしろをしっかりとって推進していく必要があることを認識した。

（参加者）ぜひ教育委員会でも声を挙げていただきたいと思います。

（参加者）さきほどの黒柳委員の質問に対しては、学校運営協議会の回数がちょっと少ないと感じている。校長が示す学校運営方針の審議と、子供たちの授業の見守り、現状の把握に時間がかかり、なかなか積極的な活動までの時間的な余裕がない。ゆえに、CS の活動内容がまだ広がっていないと思う。

（黒柳委員）回数はどれくらいか。

（参加者）学校長の任意になるが、3か4回。他地区では年に7回開催しているところもある。

（参加者）PTA が活動しにくいことをCSの方に移していく。学校運営協議会の会長名で、全家庭に対して情報を流している。

（参加者）小学校と中学校で、学校運営協議会に参加している。中学校では、子供たちに職業体験を行っている。商工会とのつながりがあり紹介があった。中学校と小学校では違うと思う。小学校の方も、本当に地域と密着している。学校から依頼を受けて会議を開き、いろいろな体験を行っている。

（下鶴委員）具体的にどのように地域がまとまったのか。

（参加者）地域の自治会が動き、PTA 会員にも伝えて協力して活動を行っている。子供のことを考えて、中期、長期的に続けていきたい。

（参加者）必要性を実感しながら活動しているがいいと思う。

（参加者）私の地区は学区が非常に広い。資源回収の方法が議論になった。今年から、中学校にまとめて持ってくるようにしようとした。高齢の方が準備はできるが運べない。何か、いい例はあるか。

（参加者）資源回収はやめた。地区からは回収してほしいという声が上がったが、今年はやめた。中学校にコンテナを置いてある。中学校のボランティア部があるので回収している可能性もある。小学校はアルミ缶の回収のみ。

（参加者）搬入数自体が少なくなってきた。各自治会でも同じようなことをやっている、その兼ね合いもあるのかなと思う。

（参加者）若手の教員に頼っているところがある。

（参加者）ボランティアの精神で助け合えることはうれしく感じる。

（下鶴委員）ありがたいという気持ちは大切である。学校には、感動がいっぱい転がっている。感動するというのは、こちらの気持ち、心持ち次第なのかなというふうに思った。ウェルビーイングで幸せというけれども、幸せとは、そんな大きなことではなくて、日々の中で、いろいろな幸せを感じられて、豊かに生きていけるものだと思う。小さな幸せの積み上げが、ウェルビーイングにつながるのではないかと思う。

○児童生徒数が減少していくことについて

（黒柳委員）今後の方向性について心配していることはあるか。

（参加者）まず PTA の話に戻るが、ちょうどこの秋にまた次年度の PTA 役員を集めて、次を決めなければという中で、そろそろ、誰も決まらない年が出てくるかなという心配をしている。PTA のメリットみたいなものが必要なのではないか。例えば外部のそれが会社なのか、第三者委員会がわからないが、学校でも親でもない主体による会議の場などをオフィシャルで設ければ、そこに参加せざるを得ない。PTA は任意の組織である限界があるなと思っている。

（参加者）市 P 連でそれをやるということでも、限界を感じているのか。行政に話をしているのか、連絡協議会として話をしているのか。

（参加者）そんな難しい話ではなくて、次の役員が決まらないという不安である。

（参加者）役員決めを第三者にやってほしいという気持ちはよくわかる。

（参加者）要望としてお願いしたいのは、先生への保護者からの問い合わせを考えると、民間企業ならば、カスタマーサービスという形でフリーダイヤルで専門の窓口で受けている。結構、メンタルをやられやすいところがある。今回の計画でも、先生方が志をもって、本当に教育に専念できる環境を考えると、問い合わせ先をある程度設けて、1 回そちらで対応してほしいと思う。

（下鶴委員）ありがとうございます。

（学校教育部長）おっしゃる通り、保護者の皆さんからもいろいろなニーズや要求があり、担任の先生が一つ一つ丁寧に対応していると、他の仕事がたまってしまう。教育委員会としても、これまで具体的な策をお示しできていないというところは申し訳ないと思っている。子供たちに授業を提供するという立場、子供たちを指導していくという本来の部分ができるように、他都市の情報などを集めて何らかの形で施策として打ち出していきたいと思う。ただ、お子さんの事情とか、家庭の様子は、担任や学

校が一番わかっている。第一報を他で受けるとしても、そこに任せてしまえば終わりということにはならないと思う。

（参加者）全てを行政がやるのではなく、PTA にも伝えてほしい。地域には議員もいる。予算を取り、活動しやすくなるようにできればいいと思う。PTA から議員にもお願いしていきたい。

（黒柳委員）ここまで施策のこと、CS のことをお伺いした。最後に発言したい方はいるか。

（参加者）現在は、PTA と学校、協議会の中でも、みんなで協力しながら活動している。役員については、1 年だけだと引き継ぎがすごく難しい。芯をうまく、わかりやすく立てていきたい。みんなが聞いて、これを頑張ろうという簡単なものを取り組んだ方が、学校としても地域としても取り組みやすい。各家庭で話し合える場が必要であると感じる。

（黒柳委員）CS もそうだが、専門用語だけで説明しても伝わらないことがあるので、そのあたりをわかりやすくしていきたい。現在策定している第4次浜松市教育総合計画について、浜松の子供たちが誰一人取り残されることなく、平等に教育が受けられ、そして将来にしっかりと育っていける場というような形で、地域と学校、保護者、地域で見守っていくことができればと思っている。

令和6年9月7日移動教育委員会・意見交換記録（中会議室西）

（学校教育部次長）第4次浜松市教育総合計画（案）の概要を説明

○「確かな学力」の育成について

（教育長）昨年度実施したアンケートでは、「確かな学力」に期待している声が多く聞かれた。今は一人一台端末を活用して教育活動を行っているが、「確かな学力」の育成について、意見を伺いたい。

（参加者）課題解決能力ではなく、暗記や記憶をするということ言えば、ゲーム要素のあるアプリを家で子供が毎日10分程度やっており、効果があると感じている。生成AIはまだ企業でも探り探りの部分があるため、教育現場では難しいかもしれないが、海外ではどんどん積極的に使っているの、日本が置いていかれてしまうかもしれない。

（参加者）自分の子供は頭痛持ちで、毎日の登下校の荷物が重いと大変なため、できるだけ教科書等を学校に置いている。ただ、教科書等が家がないと家庭学習のときに分からないことを調べることができず、困る場面がある。私が子供に教えるときもあるが、私の時と教え方が違う場合があるため、説明をするのも難しい。

（教育長）デジタル教科書を拡充していく方向性で動いている。今年度は英語で始まっているが、ご指摘のとおり、まだ紙媒体がメインのため、今後に期待をしてほしい。昔は教科書等の持ち帰りが当然だったが、今はそうではないため、健康面に不安がある場合等には置いていっても差し支えない。

（参加者）AIはとても便利なため、どんどん教育に取り入れてほしいと思っているが、ICT教育では、何が正しくて何が正しくないかを判断できるリテラシーを高めていくと「確かな力」が身につくと思う。

（参加者）リテラシーとセットで、倫理観を身につけてほしいと思う。社会人になっても、倫理観が無ければ、人の役に立つことができないのではないかなと思う。

（田中委員）数年前から一人一台端末が始まっているが、まだ使いこなせていない場面もあるかもしれない。端末の活用に関する感想等があれば伺いたい。

（参加者）毎日持ち帰りをしているが、教科書と端末を両方持ち帰るので重い。また、

持ち帰っても5分くらいしか使わないので、持ち帰る必要性があるか疑問である。

（参加者）子供たちは使いこなしているが、若くて端末の取扱に慣れている教員とベテランで端末に慣れていない教員で差が出てしまうことを懸念している。若い教員は積極的に端末を使い、ベテランの教員は紙媒体中心になってしまうことが心配である。

（教育長）今おっしゃっていただいた、教員間の格差は課題の一つである。また、教員間だけではなく、学校間の格差というものも出てきていて、それも大きな課題である。子供が同じように教育を受けられるよう改善していきたい。

（参加者）今後は、端末に関して支援員の配置をしていくのか。

（教育長）支援員の配置も重要だが、研修を進めたり、教員の意識改革をしていったりする必要があると感じている。

（参加者）優れた教員の奪い合いが自治体間や県をまたいで発生している。最終的には、どれだけ予算をかけることができるかにかかっていると思う。教育にかけられる予算が増えてくれるとよい。

（教育長）自治体間で、教育環境に差があるのは事実である。浜松市でできていること、まだ足りていないことを分析して、今後の予算編成に生かしていく。すぐには実現できないかもしれないが、逆に保護者からも、こういった部分に力を入れてほしい等があれば伺いたい。また、全国的には教員志願者が減少している中、浜松市は令和に入ってから毎年志願者が増えており、昨年、今年と過去最高の志願者となった。これは、浜松市の教育に魅力があると多くの方に感じていただいているためであり、今後も志願者が減らないよう取り組んでいきたい。

（鈴木委員）教員の志願者は増えているということだが、その資質能力はどうか疑問に思うときがある。保護者の立場で教員と接していて、その資質能力について感じることはあるか。

（参加者）自分が子供の頃と比較すると、教員の質は昔より良くなっていると感じる。昔は個性的な教員が多かったと思うが、今はそうは思わない。

○第4次浜松市教育総合計画について

（教育長）第4次浜松市教育総合計画では、「粘り強さ」や「主体性」という言葉を取り入れている。それらと子供の様子を結び付けたときに何か思うことはあるか。

（参加者）計画を見ると、とても美しくキラキラしているが、社会はそんなにきれい

ではなく、ネガティブなことを力に変えて頑張るときもある。計画にうたうことは難しいと思うが、狡猾さのようなものも、実際に社会に出たときに必要だと感じる。

（参加者）1学級の人数が多すぎると教員の能力が発揮できないと思う。昔であれば、叱って言うことを聞かせていたかもしれないが、そうすると主体性が育まれないと思う。担任する子供の数が減れば、教員も余裕や懐の深さが出て、よい教育ができると思う。

（教育長）昔は全員で同じ進め方をしていけないと、授業が成り立たなかった。今後は、教育DXや教育データの利活用等により、一人一人に合った学習ができるようになると期待している。授業の目標は全員同じだが、そこにたどり着く方法は子供によってそれぞれ変わることができるようになる可能性がある。そうすると、教員も教えるというよりは子供のサポートをしていくことが重要となる。同じ授業で、子供によってやる範囲が違って、子供が主体的に取り組んで教員がサポートする形ができれば、と思っている。

（参加者）何かシステムを導入する等の動きはあるか。

（教育長）子供がドリルをする時に、昔は全員同じ問題を解いていたが、今は解答傾向からアプリが子供にあった問題を考えてくれている。他にも、未導入だが、中間テスト等をデジタルにして瞬時に採点ができるものも検討している。教員にとっては業務削減になり、子供にとってもすぐに結果が分かる。

（学校教育部次長）文部科学省に研修生として派遣されている教員がおり、定期的に報告を受けているが、採点システムは国をあげて構築に取り組んでいる。ただ、採点システムを導入していくにあたり、問題を作成する側も採点しやすい問題を作成する必要があるという課題も伺っている。また、市内で数校、民間企業が開発したシステムを国の制度を活用して試験的に使っている学校もある。

（参加者）学力をデジタルで伸ばしていくことはよいと感じるが、デジタルで効率化された分、どこに力を入れるかと考えたときに、「豊かな心の育成」が重要だと感じる。私は民間企業で働いているが、企業でも社会貢献ということが重要視されている。企業にとっても、若い人の早期離職で人材が定着しないという課題があるため、子供のころから心の育成というものに時間を割いてくれるとありがたい。学力は塾などの別の手段で対応できるかもしれないが、心を育成するのは、長時間子供が過ごす学校で取り組めるとよい。

（教育長）第4次浜松市教育総合計画では、それぞれの立場の人が、協働したり、相互に作用したり、よりよい環境を作っていく「信頼・協働」というものをコンセプトの一つに設定しており、力を入れていきたいと思っている。

○子供に望むことについて

（田中委員）市民アンケートの結果で、子供には豊かな心や規範意識を育ててほしいという声が多かったと聞いている。子供にこうあってほしいとか望むことがあれば伺いたい。

（学校教育部次長）先日、第4次浜松市教育総合計画のパブリック・コメント実施にあたり、地域分科会で計画を説明した。その際に、委員から、餅投げのときに足が不自由な高齢者の周りで子供が餅をたくさん拾っており、こういったことがないような教育をしてほしいと意見があった。話を聞いて考えたが、昔は高齢者から規範意識等を教わっていたが、今はその場がなく、高齢者とどう接したらよいか分からないのかもしれない。社会環境が変わってきていると感じた。

（参加者）子供がいろいろなことに気付くことができるかが大事ではないか、と感じた。例えば、自分たちが使っている校庭にゴミが落ちていることに気付くことができるか、先ほどの高齢者の話も、高齢者が困っていることに子供が気付くことができるか、そういう観点があるとよいと感じた。

（参加者）小さなことでも自分から周りに言える環境ができるとよい。例えば、嫌なことがあったときに周りに言えると、周りも気付き、自分もすっきりできる。言わなければ気付かないこともたくさんある。

（鈴木委員）どういう環境であれば言いやすいと感じるか。

（参加者）何かあったら担任に言ってほしいとは言われているが、教員は忙しいので、こんな小さなことを言っていていいのかと感じてしまう保護者は多いと思う。

（参加者）私の学校では、本読みカードに保護者からコメントを書くことができるスペースがあり活用している。

（参加者）本読みカードだと、担任から嫌なことを言われたりされたりしたときに、書きにくい。気軽に言える窓口があるとよい。

（参加者）さくら連絡網などで、保護者から学校に気軽に言えるようになるとよい。

（参加者）日本人は言い合うことが得意ではなく、言わないことが美德となっている部分もある。例えば、ディベートや言い合うような勉強、教育が必要だと感じた。そういった教育をしていくと、主体性も育まれるのではないか。

（教育長）直接本人には言えないが、相談できる窓口を複数用意することは重要である。言えないまま、どんどんと悩み等が大きくなってしまふのはよくないため、選択肢を増やすことが大切である。

（田中委員）子供から相談されたことに対して、子供の気持ちを汲み取ることができる力が教職員には必要だと感じた。

（参加者）保護者が教職員を評価する仕組みがあるとよいかもしれない。

（教育長）学校は組織で動いているので、何かあったときには学校に相談していただければ、と思う。小さなことでも見逃さないようにしていくので、どんなことでも相談できる信頼関係の構築が重要である。

（参加者）相談した結果、大事になってしまふと言いにくく感じてしまふかもしれない。簡単に相談できて、あまり重く受け止めないような窓口があると相談しやすく感じる。

（教育長）相手のことを考えすぎると、相談できなくなってしまう場合もある。気軽に相談できる環境づくりを意識する必要がある。

（参加者）小学校の草刈りボランティアをしている。少子化で子供が減り、校庭に雑草が多く生えていたが、防草シートを購入していただいて楽になった。他の学校も雑草が生い茂っている様子を見たことがあるので、何か対応策があるとありがたい。

（教育長）小規模校は対応できる教員も少なく、おっしゃるとおりの状況が発生しており、学校からも相談を受けることがある。毎年防草シートを足していったり、長期休業期間中のみ敷いたりするなどの対応ができるとよい。防草シートの効果はどの程度あるか。

（参加者）防草シートをよく生える場所に固定をしているが、かなりの効果がある。学校にはとがった雑草が生えており、子供が手をつくると危ない。市博物館の芝生広場にも同じ草が生えていたので注意が必要だと感じる。

○コミュニティ・スクールについて

（教育長）コミュニティ・スクール（以下、CS という。）の関係で、何か意見はあるか。

（参加者）学校応援団というものがあり、多くは高齢者である。ミシンを使う授業や

劇の衣装作成など、学校の授業補助や草刈りに関わっているが、もっと募集してもよいのではないかと感じる。

（学校教育部次長）CS は今年度から市立小中学校全校で導入しており、学校と地域が学校活動の改善や地域活性化を目的として設置しているが、全ての関係者にその考えが浸透しているわけではないかもしれない。保護者にも活動を周知してその趣旨に賛同していただけるとありがたい。

（参加者）自分の学校では、活動に協力してくれる人を募っても、毎回同じ人が来て、人が集まらなと聞いている。学校間の取組を共有できるような横のつながりはあるか。

（学校教育部次長）コーディネーターやディレクター向けの研修会を行っており、そこで情報共有をしている。

（参加者）いつも参加してくれる人以外の掘り起こしが大事である。

（学校教育部次長）昔は定年となる 60 歳から、いろいろな地域活動を行っていたが、社会環境が変わってきていて、今は 75 歳位まで働いている人もおり、働いていると地域活動に参加できない。そうすると地域人材も枯渇してしまい、教育活動にも影響が出てしまうという懸念がある。

（参加者）授業を手伝いながら、子供の授業や様子を見に来ることができるので、そういうことをアピールしてもよいかもしれない。

（教育長）学校運営協議会に関わっていない人へも情報が届くようになるとよい。

（学校教育部次長）海外と日本では、「ボランティア」という言葉の意味合いが違っている。本当の意味でのボランティアが根付いていかないと、続いていかないのではないかと感じる。

（教育長）中学校では、部活動の外部指導者を CS を通じて募集しているところもある。CS を導入した時期が学校によって異なっているため、取組には差があるかもしれない。

（参加者）CS と似たような組織で青少年健全育成会がある。重複している部分もあるため、重なる部分はうまく調整していただけると PTA としてもありがたい。

（学校教育部次長）CS と青少年健全育成会は違う部署が担当しており、目的も異なっているが、同じような活動もしていることから担当部署には状況を伝えている。今後、改善されていくことを期待している。

（鈴木委員）保護者に教員アンケートを行った場合、何か書けることはあるか。よい教員であれば、若くても管理職になって力を発揮して欲しいと思っている。

（参加者）アンケートに書かれた内容が本当のことかを判断するのは難しく、アンケートに振り回されてしまうのではないか。保護者はアマチュアなので、プロである教員を評価するのは難しいのではないか。

（参加者）部下が上司を評価する企業もあり、子供へのアンケートも必要だと感じた。

（参加者）教員の異動スパンが短いと感じ、寂しさもある。

（教育長）一つの学校に長期間在籍すると視野が狭くなるため、まずは12年間で3校、ということを目処に人事配置をしている。管理職も3年程度を目途にしたいと思っているが、人事上の都合で異動スパンが短くなってしまう場合もある。

（田中委員）教員自身も、ある程度の期間は同じ学校で仕事をしたいと思っていると感じる。1年目はまずやってみて、2年目で慣れてきて、3年目に自分の色を出していく、と聞いたことがある。

（参加者）保護者も感情が入ることがあり、新しく赴任した教員と何年も教わっている教員では、評価する物差しが変わってくる。新人の教員とベテランの教員も同様であり、全員を同じ目線で考えた上での保護者からの評価は難しいと感じる。

（参加者）評価というより、こんなよいことがあった、こういったことは直した方がよいという情報を伝えることができるとうい。

（参加者）先日、三者面談があったが、その情報が学校内でどう共有されているか分からない。

（鈴木参事）基本的には、校長まで情報が上がるようになっている。例えば進路については、校長も承知しており、担任の判断ではなく学校としての判断で話をしている。

（教育長）担任から校長に話を上げていく過程で情報が伝わらなくなないように、報連相の徹底、風通しのよい学校を心掛けている。

（参加者）子供にとっては大事な1年であり、異動したての教員、何年もいる教員と様々な教員がいるが、教員によって環境が変わってしまうのは子供にとってよくない。

（教育長）本日は多くの意見をいただき、感謝している。本市の教育に対して、期待

の大きさを感じており、その期待に応えるために教育委員会一丸となって取り組んでいく。今後も御理解、御協力をお願いしたい。